梟の大旅行

林芙美子

青空文庫

むかしあるところに、梟が住んでいました。ふかいふかい森のなかで、晝も、ほの暗いところなのです。あんまり暗い森のなかなので陽氣なお天氣の好きな、小鳥や、りすも、みんな、森のそとがわに出て住んでいました。

梟はたった一人ぼっちで淋しいので、晝間も歌をうたって暮していました。

ぼろ着て奉公！

ぼろ着て奉公！

梟が、ぱたぱたと羽ばたきをして、こんなうたを歌うので、森のなかの楡の木は、ほんとに淋しくなって退屈で仕方がありませんでした。

ああ、また梟が何か云っている。どうして、あいつはあんなにいんきでじめじめした奴なんだろう。少しは、陽氣な歌でもうたってくれるといいんだのになアと、ぶつくさ云うのです。本當に森のなかはじめついていて、地びたの苔は、水氣でぐっしょり濡れていました。

梟は、この森で生れたのではないのですけれど、もうこの森へ來て三年ばかりになります。誰も友達がなく、淋しそうに一人で暮しています。

「おい梟君、君はいったい、何が愉しみで生きているンだね？」

と、楡の木がききました。

梟はきょとんとした表情で、

「わたしかね？」

と首をかしげて、猫の眼のような、金色に光った眼を暗がりの方へむけました。ぷきっぷきっと固いくちばしを鳴しながら、「そうだね。別に愉しみと云うものもないが、まア、こうして、平和でいられる事が一番ありがたいンだよ。——私はね、昔は妙な暮しをしていたのさ。いろんな世界も見て來たし、とても怖ろしい思いもして來たものさ。君は何も知らないから、自由に飛べる私を妙な奴だと思うだろうけれど、本當は、私はこれが一番しあわせなンだよ。」と云うのです。

「ほう、君は、そんな面白いところを見て來たのかね。私は足が動かないので、遠い世界をみた事はないが、梟君、おねがいだから、君の見たいろんな世界の話をしてくれないかね。」と頼みました。

梟は身の上ばなしを始めました。

私がはじめてものごころがついたところは、人間の住んでいる世界で、私は金色のまるい籠の中にいたのです。べっとりとしたすりえと、時々貰う肉や鶏のもつでそだてられたンですがね、いつも、籠のまわりを、とても大きいまるいものや、私に似たような生物がじいっとのぞいて私を見ているのですよ。私は不安で仕方がないので、いつも、とまり木の眞中にじいっとして暮していたンです。大きいまるい生物は人間の顔なのだそうで、この顔が私に餌をくれるのです。私に似た生物は猫と云う動物なンでね。おそろしくすばしこい奴で、人間がいなくなると、いつも、籠のそばへきてうろつ唸っているンです。私はこの籠の中に二年もいました。一週間目には、私はジョロで水浴をさせられる習慣なのですが、寒い日にはやりきれないと思いましたよ。しばらくして、私に餌をくれるお嬢さんが亡くなってしまいました。お嬢さんが亡くなってからは、餌も忘れ

られがちで、私は、死ぬのではないかと思うほどやせほそって、生きている氣力のない日がつづきました。夏になってから、私はとう思い切って、餌箱を入れる戸口から夜の戸外へ出てゆきました。始めは不安で、猫に出くわさないかと心配しました。板のつるつるした床を歩いているうちに、ふっと羽根を擴げてみました。何となく躯が宙に浮くのです。自分で自分の飛行術に自信がなかったのですが、急に私は夢中で飛びました。ぱたぱたとね。椅子の背中にとまってみたり、フエニックスと云う南國の植物だと云う植木鉢に這いあがってみたり、歩いたり、飛んだりすると云う事は、狹い、小さい籠の中にいるよりはずっとましなのです。そして、とても冒險的で愉しくて仕方がありません。

人間はいつも、もうもうと煙を吸っているので、私は灰皿のなかをつついてみました。人間の吸う煙のかたまりはとても辛くてたべられないものです。私は開いている　轉窓から、そっと戸外へ出てみました。私は何とも云えないいい氣持でした。月と云うものを始めて見たのですが……茄子色の空に、まんまるく大きい光ったものを見て、私は何だろうと思ったものですよ。屋根々々は夜露で光っていますしね、庭の木もきらきら露に光っていて、とても美しい夜でした。

風と云う不思議な音を庭の木の上でききました。庭の木が、梢を鳴らしてさやさやとうごいていたし、蟲もないていたし、世の中は何と云う廣さなのだろうと思いました。

木から降りて、私はまたそこいらを飛んでみました。とてもいい氣持ちに飛ぶ事が出來ます。

だんだん夜が明けて來ましたので、私は或家の軒下にとまって、じっと四圍の氣配をみていました。私の住んでいた家はもう判りません。夜があけかかると、近くのところで、鷄の鳴く聲がしました。小鳥が眼をさまして來ました。私はおなかが空いて仕方がないので、軒下のくもの巢をつついたり、ごみをつついてみたりしました。

夜が明けて來ますと、私はもうまばゆくて珍らしい世界をみる事が出來ません。陽がぽかぽかとてりつけて、軒下が妙に暑苦しくなり、私は眠くなりました。

その夜、私は、また、軒さきを出て、勇氣を出して飛びました。柔い土の上には、おいしい蟲の御馳走があります。私はお腹がいっぱいになるとまた飛びました。

三晩目には、私は、もうだいぶ遠くまで、もとの住家から離れてしまったようですが、とうとうまた人間につかまって、トラックと云うものに乘せられて、一日じゅう私は生きた心地もなく動くものに乘せられていました。

廣い廣い海と云うものも呆んやりとした眼にうつりました。私はまた人間につかまって前よりも小さい竹の籠に入れられました。小さい籠は、私が羽根を擴げるといっぱいになるほど狹いのです。私はいきおいよく、二三度羽ばたきしました。すると、籠の上のおもしがはずれて、籠がひっくり返りました。私はまたそとへ出ることが出來ました。

その家は自動車のガレージだったので、私はそのままぱたぱたと、コンクリートの固い道を這うように飛びました。水道の水がしたたっているので、ごくごく飲みました。とてもおいしい水でした。すると、何だか黒い大きい動物が、とても大きい聲で吠えたてて私に向って來ます。私はびっくりしてトラックの上へ飛びあがりました。

その動物は犬だったのです。

犬はとてもよく吠えました。私はそっと屋根裏づたいに戸外へ出て、月に光った白い道の方へ飛んでゆきました。白い道だと思ったのは廣い河でした。河岸にはいっぱい食物がありました。森閑として、人間は家の中によく眠っているので、四圍はまるで私だけの天地です。

私は、もう、もとの住家に戻ってゆきたい氣は少しもありませんでした。でも、時々、やさしかったお嬢さんの事を思い出しました。

河にはどうして、こんなにどっさり水があるのかしらと不思議に思いました。ぴちゃぴちゃと水が鳴っています。私も、ほっほっと鳴いてみました。すると、思いがけない事に河岸の藪の中に何だかごそごそと動く音がしました。私はむじなだと思ったものですから、またぱあと飛び立って、船の屋根にとまりました。

足もとがゆらゆらゆれるので、また飛び立って地びたに降りました。すると、今度は、私の家にいた猫と似ている生物がさっと私に向って來ました。まっしろい猫です。私はびっくりしてさっと飛び立ち、小さい樹の上へ逃げてゆきました。

世の中に出たのはいいけれど、私は籠の中のように、平和に眠る事が出來ません。私は苦しい旅ばかりそれからつづけました。けれど、私の羽根はますます丈夫になり、私は、だんだん心も元氣になりました。この森へやっとたどりついた時には、私は、もう相當年をとりました。私は三年も旅をつづけて、やっと、この安樂な森へたどりついたのです。

私はこの森が一番好きになりました。

たべるものも、よくを出さないかぎり、平和に食べられますし、自由に歌をうたえますし、何と云う住み心地のいいところだろうと思っています。私はまだ、あと一二年は長生き出來るでしょう。

森の神様に心から私は感謝しているのでございます。

梟はそう云って、ぷきっぷきっとくちばしを鳴らしました。

青空文庫情報

底本：「童話集　狐物語」國立書院
　　1947（昭和22）年10月25日発行
入力：林　幸雄
校正：鈴木厚司
2005年5月7日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

梟の大旅行

林芙美子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/